

【書評】

油本真理『現代ロシアの政治変容と地方
—「与党の不在」から圧倒的一党優位へ—』
(東京大学出版会、2015 年、ix+290+35 ページ)

大串敦
(慶応義塾大学法学部准教授)

Aburamoto, Mari, *Explaining Political Changes in Post-Soviet Russia: Decentralization, Centralization, and the Regional Elite Configuration*
(University of Tokyo Press, 2015)

OGUSHI, Atsushi
Associate Professor, Faculty of Law, Keio University

1. 本書の構成・内容

現代のロシアで「統一ロシア」が、他政党を圧倒する位置にあるのは周知の事実であるが、この党が基盤をどのように拡大したのか、地方レベルでの具体的な過程を明らかにした研究は、管見の限り、欧米のものを含めてない。本書は、ソ連解体後から現在までのロシアの地方政治状況を踏まえ、「統一ロシア」の浸透過程を詳細な現地調査によって分析した力作であり、今後、ロシアの政党政治、地方政治を論じる上で日本では必読書になるであろう。

はじめに本書の構成を確認しておこう。本書は次の目次に示されるように、序章と終章を除くと、大きく分けて2部構成になっている。

序章 政治変容を分析する視覚

第1部 ロシア政治の基本枠組み—中央と地方

第1章 地方政治の基本構造

第2章 現代ロシアにおける中央地方関係の変遷

補章 政治制度

第2部 沿ヴォルガ地域の事例—圧倒的一党優位に至る多様な経路

序 フィールドワークと資料

第3章 サラトフ州

第4章 ウリヤノフスク州

第5章 サマーラ州

第6章 ヴォルゴグラード州

終章 政治変容の多様性と多層性

このうち、序章では1990年代初頭から2010年ごろに至るまでの広い時期を対象とすること、この間に生じた「統一ロシア」党の地方レベルまでの浸透を、地方エリート間の競争に注目しつつ解明することを宣言し、そのための時期区分と分析枠組みを提出している。また、先行研究の検討や資料の紹介、対象地域選定の合理化も序章で行われている。

第1章、第2章、補章からなる第1部は、第2部の実証部分の前提として、中央政界の動向と地方の関係を幅広く議論している。第1章では、中央の諸事件（ペレストロイカ、1991年の8月政変や1993年の10月政変など）を受けて、州レベルでも共産党エリートの分裂が生じ、州行政府、州都行政府、共産党地方委員会の三つが競争選挙を戦う主要なアクターとなったこと、政治課題として「ソ連型福祉」の清算が重要であったことが論じられる。第2章では、ソ連解体後の中央・地方関係を論じている。連邦構成主体が自律性を強めていた1990年代から、2000年代に入り中央集権化が進み、2000年代中ごろには中央の統制がかなり強化されるに至った経緯を制度面と財政面から説明している。続く補章は、選挙法・政党法などの制度的枠組みと主要政党の紹介である。

本書の白眉である第2部では、サラトフ、ウリヤノフスク、サマーラ、ヴォルゴグラードの4州において、地方政治エリートの配置と、「統一ロシア」が浸透する過程でその配置にどのような変容が生じたのかを論じている。第3章のサラトフ州では、先に挙げた州行政府、州都行政府、共産党地方委員会のうち、州行政府が圧倒的な地位を築いた州とされている。州知事が全国政党との連携に消極的であったため、当初、「統一ロシア」の支部創設にも州行政府は主導的な役割を果たさなかった。しかしながら、2000年代中ごろからの全国的な中央集権化の中で、州行政府も「統一ロシア」を受け入れるようになり、その後は「統一ロシア」の浸透が急速に進んだ。それに抵抗できるようなアクターがサラトフに不在だったことが浸透を助けた、との主張がなされている。

第4章のウリヤノフスク州は州行政府と共産党地方委員会が並び立った州とされる。1990年代は、この両者とも左派的な立場ながらも、微妙な対抗関係に立っていた。その後2000年代に、かつて州行政府がとった経済の「軟着陸」路線の失敗が明白なり、州行政府の基盤が弱体化した。したがって、当初「統一ロシア」はウリヤノフスク州に浸透するのに困難に直面した。状況が変わったのは、2000年代中ごろの中央集権化以降で、州行政府が「統一ロシア」と良好な関係を築くことで、同州に浸透した。ただし、共産党地方委員会も一定の基盤を維持しており、このことは2011年の下院選挙で明白となった、と主張している。

第5章によれば、サマーラ州では州行政府と州都行政府の対抗関係が顕著になった。その中で州知事は、1999年の下院選挙では、自己の選挙ブロックを立ち上げた後、「右派勢力同盟」に参画する。「統一ロシア」の前身の「統一」が結成されると州都行政府が「統一」に接近し、州行政府と対抗した。その後、中央集権化が進むにつれて州行政府も「統一ロシア」に接近するが、州行政府と州都行政府の対抗関係が消滅したわけではなく、「統一ロシア」内部での軋轢と脆弱性につながった、とされる。

第6章のヴォルゴグラードは、州行政府と州都行政府、共産党地方委員会の三者が鼎立した州であったという。1996年の行政府長官選挙では、州行政府と共産党地方委員会の連携により、対抗する州都行政府との二大政党制にも近い形が生じた。こうした中で、「統一ロシア」は州都

行政府を足場にせざるを得ず、州行政府を取り込めず、浸透は困難であった。2000 年代中盤の中央集権化の波の中で、州知事の交代が行われたが、新知事は州の権力を掌握できず、結果、2011 年下院選挙では「統一ロシア」は厳しい結果に直面した、と主張している。

終章では、これまでの議論をまとめたうえで、全国政党と地方エリートの関係という視点や、地方でのマシーン政治分析、および巨大与党内部の軋轢を考察する点は、他国との比較研究の可能性が開かれていることが主張されている。

2. 意義・疑問点

冒頭で述べたが、第 1 に、本書は長期に及ぶ緻密な現地調査に基づいた手堅い研究であり、地方に「統一ロシア」がどのように浸透していったのか、具体的な過程を明らかにした点が、本書のもっともオリジナルな貢献である。評者は最近ウクライナで現地調査をする機会が多いが、ロシアとは対照的な開放性（これはもちろん研究者としてはありがたいが、国としての「緩さ」にもつながっているように感じる）に驚かされることが多かった。この点ロシアはかなり閉鎖的あるといわざるを得ず、著者の現地調査には各種の困難が伴ったことが想像される。それだけに、本書の貢献は貴重なものである。

第 2 に、全国政党の形成に関して、中央のみならず、中央・地方関係、さらには、複数の地方を比較しつつ、地方政治独自のダイナミクスまで視野に入れて総合的に検討した著書（論文では Slider (2010) など近いアプローチをとっているものはある）は、おそらくロシア政治研究では初めてであろう。この視点が、終章で主張されている通り、どれだけ他国との比較可能性に開かれているのか、著者の今後の研究に期待したくなる。例えば、かつて岡山（2000）が主張した、「政治間関係論」と著者の方法は大いに関係していると思われる。

第 3 に、2011 年下院選挙での「統一ロシア」の苦戦に関して、本書は独自の視点を提供している。これまでは、プーチンの大統領復帰宣言による現状への「厭き」、リーマン・ショック以降の経済の動揺などによって説明されることが多かったが、本書では、地方政治エリート内の軋轢という、新たな視点を与えてくれる。

以上のように非常に価値の高いオリジナルな研究であるが、若干の疑問点も提起しておきたい。第 1 に、本書の叙述は、前提として地方エリートの配置があり（州行政府単独優位、州行政府对州都行政府、など）、そこから全国的集権化の波とともに、「統一ロシア」が浸透していく、という流れになっている。それでは、地方エリートの配置が、地方ごとに異なった理由は何だったのか、本書の記述からは十分に理解できなかった。地方政治家の才覚によるのか、各地方が工業州や農業州かといった、社会・経済的条件が大きかったのだろうか。それともこれは地方によって異なり、ある地方では政治家の才覚が功を奏したり、他の地方では社会・経済的条件が大きな意味を持ったりするのだろうか。本書の記述は地方ごとによって違うことを示唆しているようにも見えるが、この点はもう少し体系的に議論されてもよかったように思われる。

第 2 に、第 1 点ともかかわるが、地方エリートが州行政府、州都行政府、共産党地方委員会の三者に限定されているのは、なぜなのだろうか。例えば、地方の有力企業家が選挙動員で重要な役割を果たす、といった議論は以前からあったが、本書ではさしあたり排除され、時として急に出てくるような印象を受ける（例えば、220-221 ページでのサマーラ州におけるアフト

ヴァズ)。議論が複雑になるために含めなかったのか、それとも、扱った4州ではそれほど大きな役割をはたしていなかったということであろうか。

第3に、著者自身も指摘しているが、「統一ロシア」中央と地方支部の関係がもっと論じられてもよかったと思われる。ただし、この点に関しては、「統一ロシア」の中央指導部に入り、副首相、大統領府第一副長官になる V. ヴォローゼンが主役の一人になっているサラトフ州の章は、例外的に「統一ロシア」内の中央・地方関係が明白に表れていて興味深かったことを付言しておきたい。

最後に、本書の分量的な配分に関して注文がないわけでもない。正直に告白すると、評者は、本書の半分近くを占める第1部に関しては、オリジナルな貢献は少ないように考えている。逆に第2部の貢献は圧倒的である。この地域を専門としない研究者や一般読者への配慮もあって、第1部の比重が大きくなってしまったものと想像するが、本書は何より学術書であるから、もう少し第1部を圧縮して、第2部の記述をさらに厚くしてもよかったのではないだろうか。

いずれにしても、本書は今後ロシアの政党政治・地方政治を研究するうえで必読文献になるものである。最後に重要なこととして、複雑な内容を読みやすさを損なわずに叙述した、文章としての完成度も高く評価したい。

文献

Slider, Darrell (2010), “How United is United Russia? Regional Sources of Intra-party Conflict,” *The Journal of Communist Studies and Transition Politics*, Vol. 26, No. 2, pp. 257-275.

岡山裕 (2000) 「中央・地方の二元論を超えて—政治間関係論とその比較分析の可能性—」
『ロシア東欧学会年報』2000年版(第29号)、41-48 ページ